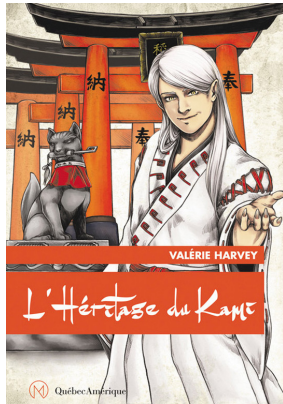


*L'Héritage du Kami* [神の遺産]の一部

ヴァレリー・アルヴェ作

後藤寛訳



ケベックアメリカ(Québec Amérique)出版 (カナダ)  
フランス語にて発行  
2020年初版発行

ヴァレリー・アルヴェの作品は全てフランス語で執筆されていますが、当サイトでは Les Fleurs du Nord の最初の数章が日本語で閲覧可能です。L'Ombre du Shinobi [忍びの影]は2020年ケベック市文学賞 (Prix de création littéraire de la ville de Québec)ノミネート作品です。

---

(一部抜粋 pp. 26-28)

彼女の注意は茶の表面に生じた小さな振動に向けられた。肉眼で捉えるのがやっとの微小なうねりが完璧なまでに滑らかな表面に乱れを引き起していた。それ自体なんら不思議なことではない。大小を問わず常に地震の揺れにさらされている国では珍しくない現象だ。

が、龍海は眉をしかめた。振動が生じたタイミングが奇妙に思えたのだ。母親が彼女の前に置いた茶は口にするには熱すぎ、湯気が螺旋状に立ち上っていた。その様を見て龍海が抱いた考えに呼応する形で振動が生じたように思われた。彼女は茶にそっと息を吹きかける様を想像したのだが、その時茶の表面に動きが生じたのだ。

龍海は家族達の方を見た。彼女の不安な気持ちに気づいたものは誰もいなかった。父親と母親は相変わらず饒舌な双子の弟の話に耳を傾けていた。龍海は目の前にあるお茶に再び注意を向けた。何の変哲もなかった普通のお茶が今では彼女にとって脅威の対象となっていた。龍海は家族に伝わる能力を手に入れることを望んではいなかった。今まで一度も望んだことはなかった。祖父と母親は炎をあやつることができた。

祖母のおじは大地の力を支配できた。彼らは人々から特別な者とみなされ、尊敬と恐怖の入り混じった視線を向けられていた。うまく言えないが彼らの持つ魔力に対する畏れの中には憎しみも見え隠れしていたことを龍海は感じ取っていた。

普通でいたかった。特別な能力のない人間として、また軍の高位に位置する戦士とつながりのある将軍の孫として。もっともそれだけでも背負うべき責務としては十分に重かった。彼女は静かにため息をついた。海から遠く離れ、平穏な湖畔の都で平和を享受する毎日を送っていた。特別な能力など必要にはならないだろう。いま気づいたことは自身の心の奥にしまっておけばいい。口外しなければ能力が発現したことに気づくものは誰もいまい。龍海はゆっくりと右手で湯呑みを口に運び一口飲んだ。すでにお茶は冷たくなっていた。感情をコントロールしながら喉をつまらせなんとか飲み込んだ。

それほどまでに龍海は今の自分に恐怖を覚えるようになっていた。



この小説の作者『ヴァレリー・アルヴェ』は、カナダ人小説家、社会学研究者かつ作詞家、歌手である。根っからのロマンティストで、生きることに関心を燃やしている。本作品の舞台であるケベック州シャルルボワ地方に生を受けた。カナダ国内では既に数冊の著作がある。夫婦デュエット『夢』の作詞とボーカルを担当。フランス語と日本語で歌っている。

2015年のNHK Worldコンクール「We love Japanese Songs」に参加。「残酷な天使のテーゼ」を歌って審査員特別賞を獲得した。大学院生（社会学博士課程）でもあり、現

在はケベック州のレヴィ市に夫と二人の子供と住んでいる。ヴァレリ・アルヴェは日本に関する本を既に6冊フランス語で出版しています。旅行エッセー、日本の少子化に関する考察、そして4～8歳の幼児を読者対象とした日本紹介の本です。

<http://www.nomadesse.com>